「TGRアカデミー」を設けました。舞台芸術に関わる研修の希望者を公募して費用の一部を助成する制度です。札幌の演劇を始めとする舞台芸術に関わる人材育成の一端をささやかながら担う役割を果たしたいと思います。

二〇一六年がすでにスタートしました。この一〇年を土台としつつ従来とは違う次の一〇年を模索したいと思っています。

## 札幌演劇シーズン　新たな発展に向けて

札幌演劇シーズン実行委員会　事務局長　飯塚　優子

札幌演劇シーズンは、間もなく開幕する二〇一六―冬で九回目を迎える。ここではまず、二〇一五―冬（二〇一四年度）から三回分の参加劇団と作品名を列記する。

二〇一五―冬
札幌座『デヴィッド・コパフィールド』
イナダ組『カメヤ演劇場物語』
新劇場『木に花咲く』
千年王国『ローザ・ルクセンブルグ』
札幌座『蟹と彼女と隣の日本人』

二〇一五―夏
パインソー『フリッピング』
風蝕異人街『青森県のせむし男』
ｉｎｔｒｏ『蒸発』
11☆９『１２人の怒れる男』
札幌座『ブレーメンの自由』

二〇一六―冬
弦巻楽団『ユー・キャント・ハリー・ラブ』
札幌ハムプロジェクト『カラクリヌード』
札幌座『亀、もしくは・・・』
ｙｈｓ『しんじゃうおへや』
コヨーテ『愛の顛末』

これら演目の並びを概観して、次のような現状を読み解くことができる。

二〇一四年度からスタートした演目公募によって、毎回、新たな劇団が選出され、演劇シーズンに参加している。二〇一五―冬の新劇場、二〇一五―夏のパインソーと風蝕異人街、二〇一六―冬のハムプロジェクトとコヨーテが初登場である。

札幌で活動する劇団にとって、演劇シーズンにエントリーすることはどんな意味があるだろうか。演劇シーズンに選定されることがひとつの目標になれれば、ステップアップの動機づけとして役割を持つことができるだろう。また、会場費と大規模宣伝の費用をシーズ

ン側が負担するので、お金をかけた演劇制作に取り組むことができる。

しかし演劇シーズンは、過去に上演され評価の高い作品をもう一度見たいという声に応えて再演のみで構成される。観客に対して一定の完成度を保証し、実績のあるものを提供することによって演劇の社会的位置を築こうという狙いがあるからである。毎回の演劇シーズンを、幅広い観客の期待に応えて、多様性のあるバランスのとれたラインナップで整える必要がある。したがって新たな挑戦や、発展途上のものを取り上げることは難しく、これはまた別の支援枠が必要になってくる。

もう一つの課題は、年二回各一カ月の演劇シーズンの根幹を担い、札幌市民のみならず観光客をも魅了する文化催事として成立させる創造とマネジメントの力量をいかに蓄積するか、である。演目の枯渇を回避して、いかに発展的な取り組みを継続できるか。その対策のひとつが、二〇一六―冬からスタートする「レパートリー作品」の上演である。『亀、もしくは・・・。』は、二〇一二―冬の第一回演劇シーズンで上演された作品である。歌舞伎十八番のように、欧米の劇場が営々と蓄積しているレパートリー作品のように、何度見ても面白いスタンダード作品をいかに生み出していけるか、それが演劇シーズンの今後を拓く鍵のひとつである。

## 二〇一五年　ドラマシアターども便り

### 江別・ドラマシアターどもⅣ　安念優子

一九八一年に立ち上げたドラマシアターども、今年で三五年になります。（不思議に、札幌では駅裏八号倉庫が始まる同じ年でした。）

市内を、どもⅠ・Ⅱ・Ⅲと移転し、旧郵便局のここにきてⅣになり一〇年目を迎えています。レンガ建ての一階（半地下）は、平台や道具・楽屋・印刷・コピー機・安念の仕事部屋、暖房の薪ストーブと台所。二階は小劇場（七〇人収容）と喫茶・ギャラリー。三階は主宰の私達の夫婦の自宅。

一月初めは二六年になるリサイクルカレンダー市、五〇〇人からの人出があります。（収益は、チェルノブイリの子供の保養への寄付から、現在は福島原発避難の子供達への活動に寄付）

二月は、江別の多喜二祭。

三月は一カ月間、脱原発芸術祭、五年目。七〇人前後の出展・ステージでの「つくるみ劇場」。

三月・七月・一二月は、酪農大ブルーグラスのコンサート。

春と秋は、大学の落研からプロになった林家卯三郎が大阪から。